その他

スポーツ科学部３ポリシーに基づく学生自己評価アンケート報告 2018 年度版

Report on students' self evaluation of achieving three policies at Nihon Fukushi University, Faculty of Sport Sciences, 2018

安藤　佳代子　　甲斐　久実代　　竹村　瑞穂　　藤田　紀昭

Kayoko ANDO, Kumiyo KAI, Mizuho TAKEMURA, Motoaki FUJITA

日本福祉大学　スポーツ科学部

Faculty of Sport Sciences, Nihon Fukushi University

1．はじめに

日本福祉大学スポーツ科学部が開設されて 2 年目である．学部教育の効果測定の尺度の一つとして本学部では毎年度初めに学部のディプロマ・ポリシー到達度を計るための調査を実施している．調査項目はアドミッション・ポリシー，ディプロマ・ポリシー，体罰に関するもの，学生にとっての学部教育の意義に関すること，学部教員の学生への向き合い方に関する項目および，課外活動（部活動やサークル，あるいはオープンキャンパスやボッチャ大会の実行委員など）経験の有無で図 1 に示すとおりである．1 年時 4 月にはアドミッション・ポリシーとディプロマ・ポリシーに関わる項目の自己評価，2〜4 年時 4 月および，卒業前の 4 年時 1 月にはディプロマ・ポリシーに関わる項目と学生にとっての学部教育の意義に関すること，学部教員の学生への向き合い方に関する項目および，課外活動経験の有無を中心に自己評価することになっている．このうち学生にとっての学部教育の意義は学部で提供している科目が学生の将来にとって意味あるものとなっているかどうかを確認することが目的である．本学部では学部所属の教員にできるだけ学生たちの名前を覚えることそして丁寧な指導と支援をお願いしている．そのことができているかどうかを確認する項目として学部教員の学生への向き合い方に関することが質問項目となっている．さらに，サークルや学部行事の実行委員といった授業以外の課外活動経験の有無に関する項目はこれらへの参加がディプロマ・ポリシーに与える影響を見るためのものである．

学部開設時からこうした調査を実施しているところは少なく，本学においてはスポーツ科学部だけである．また，本調査はアセスメントポリシー評価のツールとしての可能性を問うものでもある．

2017 年度 4 月には 1 期生に対して調査を実施し，2018 年度 4 月には 1 年生（2 期生）および 2 年生（1 期生）に対して調査を実施した．

2017 年度に実施した調査結果は本紀要 1 巻に掲載した．ディプロマ・ポリシーに関する項目の「実際にスポーツを行い，その楽しさや難しさを理解し説明することができる」や「困っている人を見たとき話を聞いたり，支援したりすることができる」と感じている学生が多い一方で「スポーツを人文科学［倫理的視点や歴史的視点］，社会科学［社会学的視点やマネジメントの視点］，自然科学［生理学的視点，バイオメカニクス的視点］など多様な観点から説明することができる」や「英語を使って自己紹介

スポーツ科学部アンケート

・このアンケートは本学部での皆さんの**学びの過程を知り、今後の授業の在り方等を検討するため**に行うものです。
・本調査は、**入学時、および各学年終了時に実施**するもので、今回が最初の調査となります。
・結果は今後の**学部のカリキュラムの在り方に生かされるとともに、学術的な場で公表**する予定です。
・ただし、調査の**結果は統計的に処理され、名前等が公表されることはありません。**また、**結果が授業の成績等に影響することもありません。**
・調査への**参加は任意で、参加しないことによって不利益を受けることもありませんが**、**ぜひご協力ください。**
・**調査の趣旨等を理解し、同意した人は以下の設問に答えてください。**4つの選択肢のうちの**どれか一つに○を**つけて答えてください。

（日本福祉大学　スポーツ科学部）

日本福祉大学スポーツ科学部アンケート　　20　　年　　月　　日実施　　学年　　学籍番号　　氏名

No	質問内容	1	2	3	4	実施時期		
1	あなたは大学で学ぶための基礎的な学力を身につけてきたと思いますか？A1	全くそうは思わない	あまり思わない	思う	強くそう思う	入学時実施		
2	あなたはスポーツに関心があり、スポーツに関する知識を身につけ将来に生かしたいと思いますか？A2	全くそうは思わない	あまり思わない	思う	強くそう思う			
3	あなたはスポーツや勉強で自分の可能性に挑戦し、自分を向上させたいと思いますか？A3	全くそうは思わない	あまり思わない	思う	強くそう思う			
4	あなたは自分の言葉で意見や思いを表現し、相手に伝えることができますか？A4	全くできない	少しできる	できる	十分できる			
5	あなたは仲間のことを理解したり、力を合わせて物事に取り組むことができますか？A5	全くできない	少しできる	できる	十分できる			
6	あなたはスポーツを人文科学（倫理的視点や歴史的視点）、社会科学（社会学的視点やマネジメントの視点）、自然科学（生理学的視点、バイオメカニクス的視点など）多様な観点から説明することができますか？D1	全くできない	少しできる	できる	十分できる		1 2 3 年終了時実施	卒業時実施
7	あなたは実際にスポーツを行い、その楽しさや難しさを理解し説明することができますか？D2	全くできない	少しできる	できる	十分できる			
8	あなたはスポーツがもたらす社会的な意味や価値、スポーツの力について理解し、説明することができますか？D3	全くできない	少しできる	できる	十分できる			
9	あなたは幼児や大人、高齢者や障害のある人に人間の発達理論に基づいたスポーツ指導を行うことができますか？D4	全くできない	少しできる	できる	十分できる			
10	あなたは人々のスポーツに対するニーズを理解したうえで、スポーツのやり方や楽しさ、スポーツの持つ様々な力や影響力を伝えることができますか？D5	全くできない	少しできる	できる	十分できる			
11	あなたはスポーツ大会や教室などの企画や運営をすることができますか？D6	全くできない	少しできる	できる	十分できる			
12	あなたは様々な社会事象や問題、疑問に思ったことに対して、それを深く知ろうとする気持ちがありますか？D7	全くない	少しある	ある	十分ある			
13	あなたは英語を使って自己紹介や会話をしたり、スポーツに関する英語の論文を読んだりすることができますか？D8	全くできない	少しできる	できる	十分できる			
14	あなたは様々な場面で困っている人を見たとき話を聞いたり、支援したりすることができますか？D9	全くできない	少しできる	できる	十分できる			
15	あなたは様々な場面で人と関わり、その集団がうまく機能するよう働きかけたり、調整することができますか？（社会人に求められる力）	全くできない	少しできる	できる	十分できる			
16	あなたはスポーツ場面における体罰はある程度は仕方ないと思いますか？（体罰）	全くそうは思わない	思わない	思う	強くそう思う			
17	スポーツ科学部で身についた力は自分の将来や仕事をしていくうえで役立つと思いますか？	全くそうは思わない	思わない	思う	強くそう思う			
18	スポーツ科学部の授業でスポーツを様々な視点から深く知ることができましたか？	全くそうは思わない	思わない	思う	強くそう思う			
19	スポーツ科学部の教員はあなたを丁寧に指導し、支援してくれたと思いますか？	全くそうは思わない	思わない	思う	強くそう思う			
20	スポーツ科学部の教員はあなたの名前を憶えてくれましたか？	全くそうは思わない	思わない	思う	強くそう思う			
21	スポーツ科学部に入学して講義やゼミ、実習などに積極的に取り組むことができましたか？	全くそうは思わない	思わない	思う	強くそう思う			
22	スポーツ科学部に入学してよかったと思いますか？	全くそうは思わない	思わない	思う	強くそう思う			
23	現在、大学の部活動・サークルに入っている　はい　いいえ	はい		いいえ				
24	これまでにオープンキャンパスや大学祭の学部事業（体力測定や講演会）など大学の行事にスタッフとして参加したことがある	はい		いいえ				

図１　スポーツ科学部アンケート実施時期と項目

や会話をしたり，スポーツに関する英語の論文を読んだりすることができる」「幼児や大人，高齢者や障害のある人に人間の発達理論に基づいたスポーツ指導を行うことができる」と評価している学生は少なかったことを報告した．

今回はその第２報である．１年生（2 期生）の調査結果を報告するとともに，２年生（1 期生）がこの１年間でどのような力をつけたと自己評価しているかを昨年度の結果と比較して明らかにする．また，１年時の授業内容および配列（カリキュラム・ポリシー）の特徴をもとに今年度の調査結果について考察することを目的とする．

本学部 FD 委員会ではこれらの調査を毎年実施し，その変化を明らかにすることで学生の成長を見ると同時に，ディプロマ・ポリシーに対するカリキュラム・ポリシーの妥当性，授業内容の妥当性，授業方法の改善点，教員の意識改革の必要性などを明らかにすることで FD 活動へと結びつけていきたいと考えている．

2．本学のカリキュラム・ポリシーに関して

2-1．カリキュラム・ポリシー

本学のカリキュラム・ポリシーは以下に示した内容となる．

① 大学生としての一般教養はもとより，日本福祉大学に入学した学生として共通に学ぶ「ふくし」に関する科目を『総合基礎科目』とし，スポーツ科学部を構成する専門諸科学の知識や研究成果を学ぶ科目及びスポーツの実践力・指導力を養う演習・実習系科目を『専門科目』，幅広い知見の獲得や特定の資格を取得するための科目を『自由科目』として教育課程を編成する．

② スポーツの文化的内容を学ぶために，「する，みる（調べる），支える，つくる，伝える」とい

う観点を軸として主な科目を分類し，それぞれに必修科目を配置することでスポーツの幅広い学びを担保する．

③　教育課程を編成する上で，以下の科目群に分類し，必要となる科目を配置する．

⑴　スポーツ文化を多角的な視点（人文・社会・自然科学的視点）から理解するための科目

⑵　スポーツの楽しさを体験的に理解するための科目

⑶　スポーツや運動の意味や価値について理解するための科目

⑷　人間の発達に基づいた系統的な指導方法を身につけるための科目

⑸　スポーツ文化の継承・発展に貢献できる力を身につけるための科目

⑹　地域をはじめとした様々なスポーツや運動の実践の場面に対応できる実践力を身につけるための科目

⑺　真実を見極める「知」への探求心を養うための科目

⑻　国際社会を含む諸領域での情報の伝達・判断・理解力を身につけるための科目

⑼　他者と，スポーツを含む多様な手段によって良好な関係を構築する力を身につけるための科目

④　コース制を取らず，履修モデルを示すことにより，学生への履修指導を行う．履修モデルに共通する学びの内容として，

⑴　幼少の子どもたちから，成人，高齢者までのライフステージ及び障害者における，生涯スポーツの実践を展開できること

⑵　スポーツニーズに応じたプログラムを策定し指導することができること

⑶　スポーツ集団を組織し運営できること

を位置づける．上記の共通内容を基本とし，以下のとおり履修モデルを想定する．

⑴　ふくしスポーツ系履修モデル

⑵　スポーツ教育系履修モデル

⑶　トレーニング科学系履修モデル

⑤　小集団によるゼミ教育は，1 年次「導入ゼミ」，2 年次「スポーツフィールドワーク」，3 年次「専門演習Ⅰ」，4 年次「専門演習Ⅱ」より一貫性を担保し，4 年間のゼミ活動を系統的・発展的に展開する．

⑥　スポーツ指導の実践力を身につけるために，学校，各種福祉施設，地域（総合型地域スポーツクラブ等）等，スポーツの多様な実践場面に出向き，実際のスポーツ指導現場を体験する「スポーツフィールドワーク」を 2 年次に，同じく「スポーツフィールドワークⅡ1」「スポーツフィールドワークⅡ2」を 4 年次に配置し，スポーツ実践の現場における課題や問題意識，学生自身のスポーツ指導への関わり方について学習する．

2-2．カリキュラムマップ

シラバス作成時に担当教員へ配布する資料には，本学部のディプロマ・ポリシーの 9 項目との関連性について，主に関係するものを「○」，要素を含むものを「△」として，表に示したものをカリキュラムマップと呼んでいる．総合基礎科目，専門科目，自由科目がある中で，1 年次の専門科目のみを抽出して表 1 に示す．

1 年次は，D1（スポーツを多角的視点（人文･社会･自然科学的視点）から理解している）が 21 科目，D3（スポーツや運動の意味や価値について理解している）が 13 科目，D9（他者とスポーツを含む多様な手段によって良好な関係を構築する力を身につけている）が 7 科目といった順に多くマークがみられている．

各科目の担当教員がカリキュラムマップの内容を理解し，シラバスを作成し，授業を行っている．今回は，1 年次のみであるが 4 年次までに学習が深まり，本学部のディプロマ・ポリシーが達成できるような取り組みを行っている．

2-3．1 年生次の授業と活動内容

カリキュラム・ポリシー①②にあるように，スポーツの実践力・指導力を養うこと，「する，みる（調べる），支える，つくる，伝える」という観点を備えることを重要視している点からも，カリキュラム・ポリシー⑨に示している 1 年次の「導入ゼミ」にお

表１：日本福祉大学 スポーツ科学部カリキュラムマップ　凡例：○：達成するディプロマ，△：関連するディプロマ

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			対応DP								
			必修	選択	自由	①スポーツ文化を多角的視点（人文・社会・自然科学的視点）から理解している。	②スポーツの楽しさを体験的に理解している。	③スポーツや運動の意味や価値について理解している。	④人間の発達に基づいた系統的な指導方法を身につけている。	⑤スポーツ文化の継承・発展に貢献できる力を身につけている。	⑥地域をはじめとした様々なスポーツや運動の実践の場面に対応できる実践力を身につけている。	⑦真実を見極める「知」への探求心を有している。	⑧国際社会を含む諸領域での情報の伝達・判断・理解力を身につけている。	⑨他者と、スポーツを含む多様な手段によって良好な関係を構築する力を身につけている。
専門科目	導入ゼミ	1通	2									○	△	△
	生理学	1前		2		△						○		
	スポーツ科学入門	1前	2			○		△				△		
	スポーツ史	1前		2		○		○						
	スポーツ文化論	1前		2		△		○		△				
	スポーツビジネス	1前		2		○								
	発育発達論（運動発達・認識発達・ことばの発達）	1前		2		△			○					
	機能解剖学	1前		2		○								
	認知心理学	1前		2		○								
	健康管理概論	1前		2		○								
	学校保健Ａ（小児・精神）	1前		2		○								
	野外スポーツ論	1前		2		△		○						△
	専門実技（ダンス）	1前		1			○	△						△
	専門実技（野外運動Ａ）	1前		1			○	△						△
	スポーツ社会学	1後	2			△		○						
	ふくしスポーツ論	1後	2			△		○	△					
	スポーツ哲学	1後	2			△		○						
	スポーツマネジメント	1後		2		○								
	スポーツ教育学	1後		2		△		○						
	スポーツキャリア教育	1後		2		△		○		△	△		○	△
	スポーツ統計学	1後		2		△								
	スポーツと脳	1後		2		○			△					
	スポーツ生理学	1後	2			○								
	スポーツ心理学	1後		2		○								
	専門実技（陸上）	1後		1			○	△						△
	専門実技（バスケットボール）	1後		1			○	△						△
小計（ 100 科目）		―	26	146	0	21	4	13	3	2	1	3	2	7

いて，授業の他にも様々な課外活動を行っている．4 月には春季セミナーにおいて，美浜町内ウォークラリーを行い，町内の施設や学校，観光場所，自然などを見て回り，地域の方々とコミュニケーションをとっている．さらに 6 月には 1 年生全員対象のボッチャ大会を実施している．その大会は全て 1 年生導入ゼミの実行委員会において運営されている．後期には，同じく実行委員会による体力測定の実施，大学祭のイベント運営，導入ゼミの全体発表会などが実施されている．また，全学年（現在は 1，2 年生）を対象に，障害者スポーツに関する大会ボランティアを募集し課外活動を行っており，ボランティアは希望者のみではあるが，今年度 4 月から 9 月までに延べ 129 名が参加している．こういったように，授業内・授業外においても様々な経験や学びができるような教育を行っている．

3．調査方法

3-1．対象

2018 年 4 月時点での日本福祉大学スポーツ科学部の 1 年生，2 年生に対して，自己評価アンケートを実施した．1 年生 188 名のうちアンケートを回答したものが 188 名，2 年生 195 名のうちアンケートを回答したものが 176 名であった．回収率は 1 年生 100%，2 年生 91.3%であった．

3-2．質問内容

アンケートの質問項目は，両学年を対象に本学部のディプロマ・ポリシーに応じた 9 項目（D1-D9），社会性，体罰に関する 2 項目（社会人に求められる

力，体罰）を行った．

1 年生に対しては加えて，アドミッション・ポリシーに応じた 5 項目（A1-A5）を追加し，2 年生に対しては，学生にとっての学部教育の意義に関する項目，学部教員の学生への向き合い方に関する項目を 6 項，課外活動（部活動やサークル，あるいはオープンキャンパスやボッチャ大会の実行委員など）経験の有無を 2 項加えた．

ディプロマ・ポリシーに応じた 9 項目（D1-D9）と社会人に求められる力の項目の回答は，「4 点：十分できる」「3 点：できる」「2 点：少しできる」「1 点：全くできない」の 4 件法で求め，得点が高いほど自己評価が高いことを意味している．

体罰の項目に関しては，「1 点：全くそうは思わない」「2 点：思わない」「3 点：思う」「4 点：強くそう思う」とした．

2 年次を対象とした学生にとっての学部教育の意義に関する項目，学部教員の学生への向き合い方に関する項目 6 項（No.17-No.22）は，「4 点：強くそう思う」「3 点：思う」「2 点：思わない」「1 点：全くそうは思わない」の 4 件法で評価した．

3-3．統計処理

4-1 では横断的分析として 1 期生と 2 期生の入学時の各項目の平均値を，t 検定を用いて比較した．4-2 は縦断的分析として 2017 年度入学者の 1 年次から 2 年次の変化の差を分析するために，対応のある t 検定を行った．4-3 では 1 期生に対し「学部教育の意義に関する項目」について，「強くそう思う」と「思う」の割合を示した．4-4 では部活動・サークル，ボランティアスタッフ参加の有無とディプロマ・ポリシーの回答を，「十分できる」「できる」「少しできる」と「全くできない」の 2 区分に分け χ2 検定を用い比較した．

なお統計解析には IBM SPSS Statistics 22 を使用し，有意水準は 5 %未満とした．

4．結果

4-1．横断的結果（1 期生と 2 期生の入学時の傾向）

(1) アドミッション・ポリシーの項目比較

1 期生（2017 年 4 月学者）と 2 期生（2018 年 4 月入学）の入学時の結果を図 2 に示した．1 期生，2 期生とも同じ傾向がみられているが，A1（入学後の修学に必要な基礎学力を有している人）は 1 期生が有意に高く（p<.01），A2（スポーツへの関心があり，学んだ知識と身につけた力を社会で活かしたいと考えている人）の項目に関しては 2 期生が有意に高かった（p<.05）．

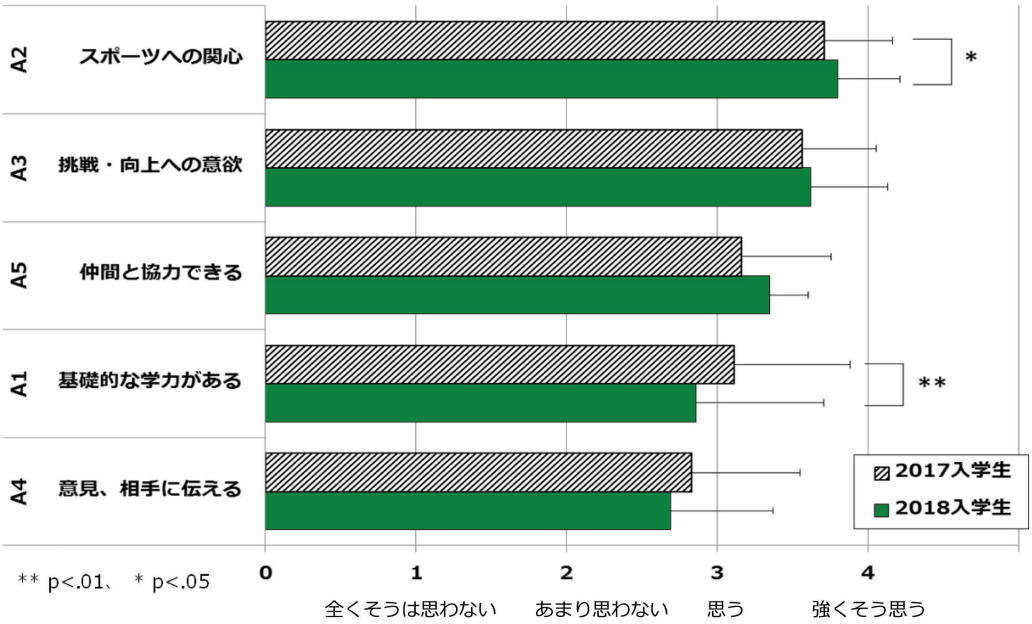

図 2　1 期生（2017 年度入学生）・2 期生（2018 年度入学生）の入学時比較（アドミッション・ポリシー）

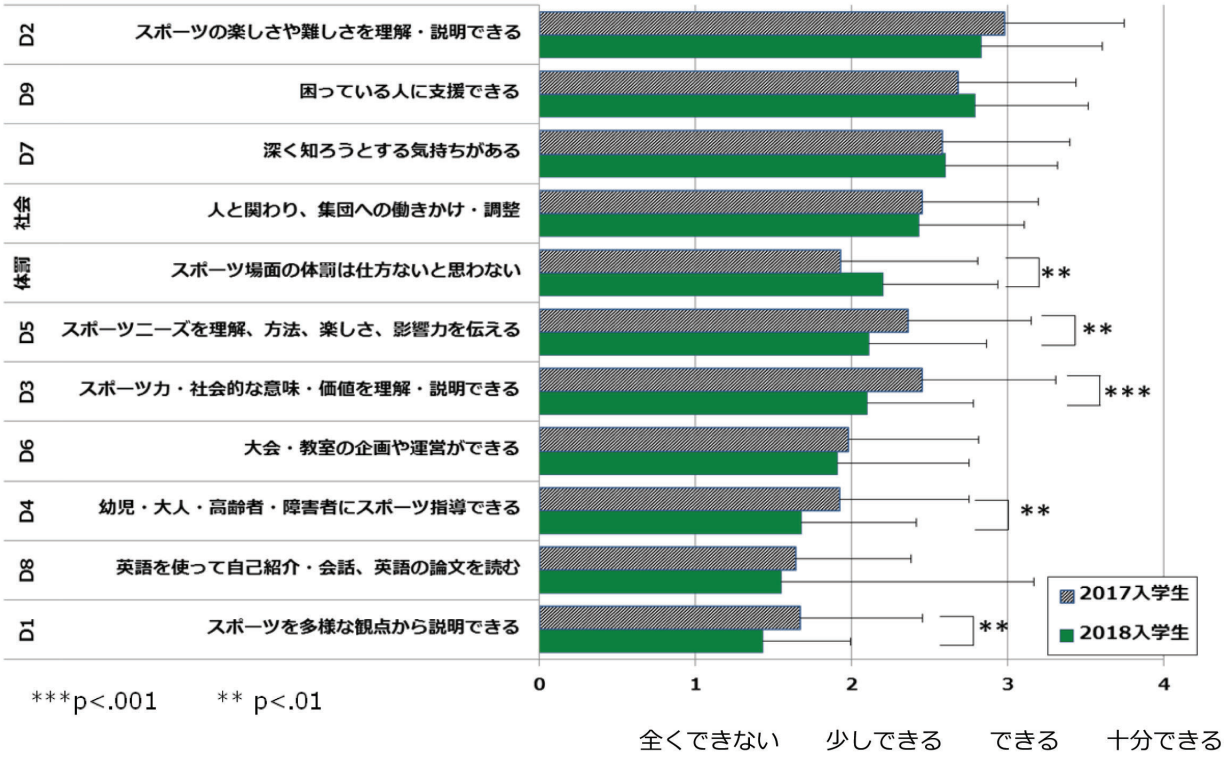

図３　1 期生（2017 年度入学生）・2 期生（2018 年度入学生）の入学時比較（ディプロマ・ポリシー）

(2) ディプロマ・ポリシーの項目比較

図 3 のディプロマ・ポリシーの項目においては，全体的に 2018 年度入学者（2 期生）の方が，自己評価が低い傾向にあった．D1（スポーツ文化を多角的視点から理解），D3（スポーツの力を理解し説明する），D4（発達理論に基づいたスポーツ指導），D5（ニーズの理解のもとスポーツを伝える）においては 2017 年度入学者が有意に高く（p<.01），体罰の項目は 2018 年度入学者が有意に高かった（p<.01）．

4-2．縦断的結果（2017 年度入学者の 1 年次から 2 年次の変化）

2017 年度入学生の 1 年次，2 年次の平均値を図 4 に示した．D4（発達理論に基づいたスポーツ指導），D6（スポーツ大会の企画・運営），D9（困っている人の支援），社会人に求められる力の項目で向上したが，その他の項目は変化なし，または 1 年次よりも低い値であった．

2 年次が有意に高かった項目としては，D6（スポーツ大会の企画・運営），体罰の項目であった（p<.01）．しかし，D7（深く知ろうという気持ちがある）項目に関しては，2 年次が有意に低かった（p<.01）．

体罰の項目（「スポーツ場面において体罰はある程度仕方ないと思うか？」）においては，体罰容認の割合が 4.5%から 0.0%となった．また，体罰を強く否定する割合は，30.5%から 46.6%と増加した．

4-3．学生にとっての学部教育の意義に関する項目，学部教員の学生への向き合い方に関する項目

2 年生を対象とした学生にとっての学部教育の意義に関する項目，学部教員の学生への向き合い方に関する項目では全ての項目において 8 割以上が「強くそう思う」「思う」と肯定的な評価をした．「強くそう思う」「思う」の回答を合わせた割合は「スポーツ科学部で身についた力は将来役立つと思うか」では 97.6%，「スポーツ科学部の授業でスポーツの様々な視点を深く知ることができた」では 97.4%，「教員は丁寧に支援，指導をしてくれた」では 98.6%，「教員は名前を覚えてくれたか」では 83.9%，「授業に積極的に取り組むことができた」では 92.9%，

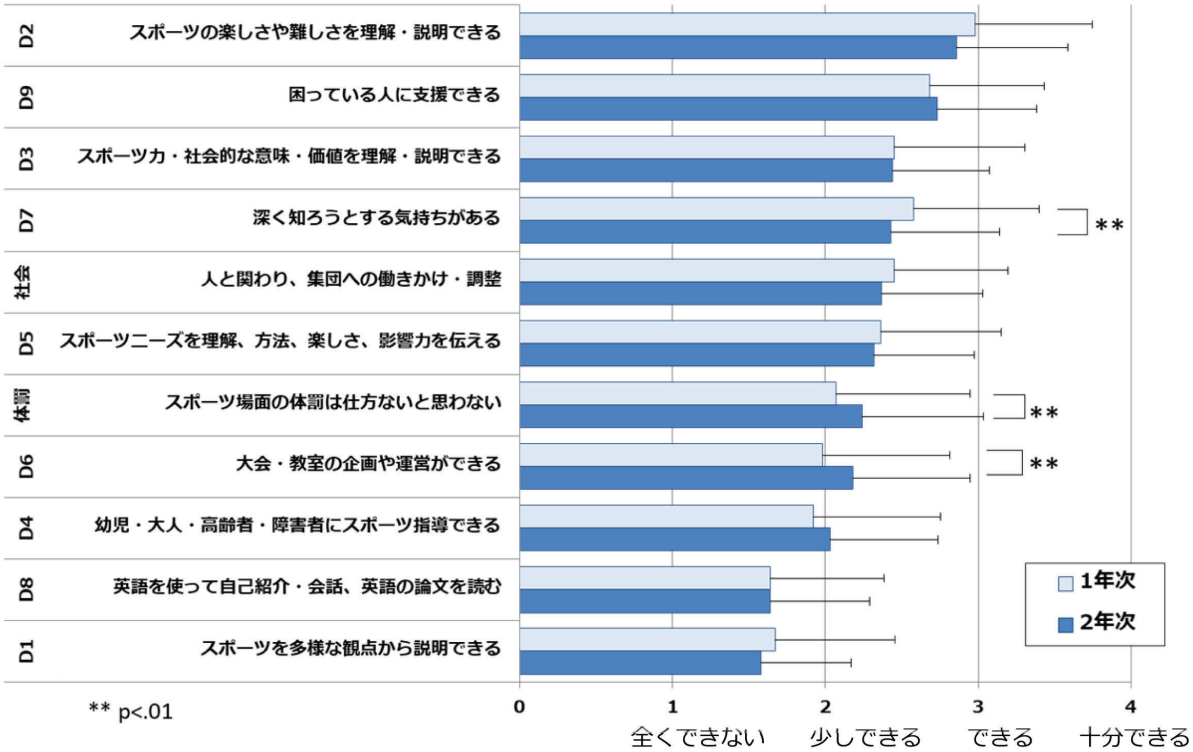

図 4　2017 年度入学生の 1 年次と 2 年次比較（ディプロマ・ポリシー）

「スポーツ科学部に入学して良かった」では 92.4% であった．

4-4．課外活動等の参加項目について

⑴　部活動・サークル，ボランティアスタッフの参加の割合

2 年生のうち「現在，大学の部活動・サークルに入っている」と回答した者は 156 名で，回答者全体の 87.6%であった．また，「これまでにオープンキャンパスや大学祭の学部事業（体力測定や講演会）など大学の行事にスタッフとして参加したことがある」と回答した者は 91 名で，回答者全体の 51.1%であった．

⑵　ボランティアスタッフの参加と各項目の回答の関係

ボランティアスタッフ参加学生（「これまでにオープンキャンパスや大学祭の学部事業（体力測定や講演会）など大学の行事にスタッフとして参加したことがある」と回答した学生）と参加していない学生のディプロマ・ポリシーに対する項目の回答の比較をすると，ボランティアスタッフに参加している学生は参加していない学生より，D9（困っている人の支援）が有意に高かった（p<.01）．

社会人に求められる力の項目に関しても，ボランティアスタッフに参加している学生の方が有意に高かった（p<.05）．

学部教育の意義に関する項目，学部教員の学生への向き合い方に関する項目においては，ボランティアスタッフ参加学生は参加していない学生より，6 項目中 5 項目が高い傾向にあった．高かった項目は，「スポーツ科学部で身について力は将来役立つと思うか」（p<.05），「教員は丁寧に支援，指導をしてくれた」（p<.001），「教員は名前を覚えてくれたか」（p<.05），「授業に積極的に取り組むことができた」（p<.001），「スポーツ科学部に入学して良かった」（p<.001）であった．

ボランティアスタッフ参加学生の 1 年次から 2 年次への変化として有意に高かった項目は，D5（ニーズの理解のもとスポーツを伝える）であった（p<.05）．また，D9（困っている人の支援）に関しても向上傾向がみられた．

5．考察

アドミッション・ポリシーの項目比較から，1期生と2期生との差としては，A1（入学後の修学に必要な基礎学力を有している人）においては1期生が高く，A2（スポーツへの関心があり，学んだ知識と身につけた力を社会で活かしたいと考えている人）については2期生が高い結果であったが，全体的に1期生と2期生は同じような傾向が見られ，項目別では，A2（スポーツへの関心があり，学んだ知識と身につけた力を社会で活かしたいと考えている人），A3（自己の可能性に挑戦する意欲のある人），A5（他者を理解し，仲間や集団づくりに取り組むことができる人）の3項目は3点以上であり，その他2項目も2.6以上を示していることから，全体的に求めている対象の入学生が入ってきている傾向にある．

1期生がこの1年間でどのような力をつけたと自己評価しているかについては，ディプロマ・ポリシーの項目からは9項目中3項目の D4（発達理論に基づいたスポーツ指導），D6（スポーツ大会の企画・運営），D9（困っている人の支援）で向上傾向にあったが，全体的に「十分にできている」と自己評価している割合は減っていた．実際に大学の深い学びを受け始めたことで，スポーツ科学に対する理解の足らなさを認識したことから「十分に理解しているとは言えない」という答えが多くなっているのではないかと推測される．今後，さらに専門性の高い科目を学んでいくことで，理解が深まることが望まれる．また，体罰に関して容認的な意見はなくなったことは，この1年間での授業において体罰の問題点と向き合い，その考え方を学べる科目として「スポーツ科学入門」，「スポーツ哲学」，「スポーツ社会学」，「スポーツ教育学」が該当していることから，その成果として考えられる．ディプロマ・ポリシー項目で低い値を示していた5項目 D1（スポーツ文化を多角的視点から理解），D2（スポーツの楽しさや難しさを理解説明），D3（スポーツの力を理解し説明する），D5（ニーズの理解のもとスポーツを伝える），D7（深く知ろうという気持ちがある）に関しては，授業内容の理解ができていないことや，1年次に自己評価を高めにチェックしていたことが要因ではないかと考えられる．D8（英語を使って自己紹介・会話・論文を読む）に関しては1年次での学びでは変化が見られなかった．これは，1年次での必修授業「フレッシュマン・イングリッシュⅠ・Ⅱ」の内容が，自己評価を向上させるまでのレベルまで達していなかったことや，英語論文を読むことは1年次では実施していないことの影響ではないかと推測される．

ディプロマ・ポリシーにある「スポーツ大会の企画運営」について，有意に高かった理由としては，課外活動等の参加が影響していると言えるだろう．課外活動参加の有無の項目から，大学行事に参加したボランティアスタッフ参加の割合が全体の51.1％を示しており，半数を超えた学生が何らかの課外活動やボランティアスタッフを経験し，その経験が「スポーツ大会の企画運営」の平均値をあげたことが考えられる．また授業内においても，実行委員会形式でのイベント運営を行うことを1年次に取り入れてきたことなども影響を及ぼしていると推測できる．

ボランティアスタッフ経験者の1年間の変化では，D5「スポーツに対するニーズを理解し，スポーツの影響力について伝えることができる」が有意に高くなっていた．このことから，授業内外での実践的な活動を通じた学びが反映している項目であると言える．また，ボランティアスタッフ参加学生の方が，学部教育の意義に関する項目，学部教員の学生への向き合い方については高い評価を示していることから，大学行事等の授業外での教員との関わりが関与していることが考えられた．

6．まとめ

本調査研究では日本福祉大学スポーツ科学部学生の，アドミッション・ポリシー，ディプロマ・ポリシー等，学部教育の意義や教員の学生への向き合い方に関する自己評価の，1期生（2017年4月入学）と2期生（2018年4月入学）の学年間比較（1年時4月の結果の横断的比較），および1期生の経年比較（1年時4月と2年時4月の縦断的比較）を行った．その結果，以下のことが明らかになった．

① アドミッション・ポリシーの横断比較では 1 期生と 2 期生とも同様の傾向がみられているが，A1（入学後の修学に必要な基礎学力を有している人）は 1 期生が，A2（スポーツへの関心があり，学んだ知識と身につけた力を社会で活かしたいと考えている人）関しては 2 期生が高く統計的有意差が見られた．

② ディプロマ・ポリシーの横断比較では全体的に 1 期生の方が，自己評価が高い傾向にあった．このうち D1（スポーツ文化を多角的視点から理解），D3（スポーツの力を理解し説明する），D4（発達理論に基づいたスポーツ指導），D5（ニーズの理解のもとスポーツを伝える）に関して有意差が見られた．ただし，体罰の項目は 2 期生が有意に高く，体罰を否定する傾向が強かった．

③ 1 期生の縦断比較では D4（発達理論に基づいたスポーツ指導），D6（スポーツ大会の企画・運営），D9（困っている人の支援），および社会人に求められる力と体罰の項目で向上し，このうち D6 と体罰の項目で有意差が見られた．一方，他の項目は変化なし，または 1 年次よりも低く，D7（深く知ろうという気持ちがある）は 1 年時と比較して有意に低かった．

④ 1 期生の学部教育の意義，教員の学生に対する向き合い方に関する項目 6 項目のうち，5 項目で肯定的な評価をした学生が 9 割以上と非常に評価は高かった．

⑤ 1 期生のうち，大学オープンキャンパス等ボランティアの経験をした学生が 51.1%おり，これらの学生は D9（困っている人の支援），社会人に求められる力の項目に関しても，ボランティア経験のない学生よりも自己評価が有意に高かった．またこれらの学生は学部教育の意義に関する項目，学部教員の学生への向き合い方に関する項目においてもボランティア経験のない学生より評価が高かった．

調査の結果，ディプロマ・ポリシー等に対して学部教育が有効に機能していると思われる項目もあるが，十分な成果が出ていないと思われる項目もあることがわかった．これらは学部立ち上げから 1 年間の教育の結果であり，今後も同様の調査を継続し，学生たちの変化を確認していく必要がある．カリキュラムマップとの対比を丁寧に行い，学年進行ごとに本学部が狙いとした力を学生が身につけているかどうかを見ていき，その結果を学部改革，カリキュラム改革に結び付けていくことが本調査の目的の一つであり，FD 活動たるゆえんである．そのためにも各学部教員が担当する授業がディプロマ・ポリシーのうち何を担っているかを意識するとともに，学生たちにもそのことを意識させて授業を展開することが重要である．

本調査結果からは授業以外のボランティア活動等に参加した学生が学部教育の意義等に関して積極的な自己評価を行っていることが明らかになった．授業と合わせてこうした活動を行いやすい環境を設定することで学生生活がより充実することが示唆されており，この点についても学部として取り組んでいく必要がある．

文献

甲斐久実代・安藤佳代子・藤田紀昭（2018）：スポーツ科学部 3 ポリシーに基づく学生自己評価アンケート報告 2017 年度版，日本福祉大学スポーツ科学論集 1，pp85-91

参考資料

本学部のアドミッション・ポリシーおよびディプロマ・ポリシー

【アドミッション・ポリシー】

① 入学後の修学に必要な基礎学力を有している人

② スポーツへの関心があり，学んだ知識と身につけた力を社会で活かしたいと考えている人

③ 自己の可能性に挑戦する意欲のある人

④ 自分の考えを表現し，意思の疎通を図ることができる人

⑤ 他者を理解し，仲間や集団づくりに取り組むことができる人

【ディプロマ・ポリシー】

＜知識＞

① スポーツ文化を多角的視点（人文･社会･自然科学的視点）から理解している．

国民が心身ともに健康で文化的な生活を送るためには，スポーツ文化を学際的・実践的視点から考え，多角的視点から理解している必要がある．

② スポーツの楽しさを体験的に理解している．

自発的な運動の楽しみを特性とする文化であるスポーツ文化を普及，振興していくためには，競技力の獲得等によって得られる精神的充足感のみならず，本質的なスポーツの楽しさを体験的に理解している必要がある．

③ スポーツや運動の意味や価値について理解している．

すべての国民にとって，健康の維持増進のみならずスポーツや運動がもたらす多様な意味や価値について理解している必要がある．

＜技能＞

④ 人間の発達に基づいた系統的な指導方法を身につけている．

スポーツや運動の指導にあたっては，幼児から高齢者まで，また障害者を含んだすべての人間を対象にその発達や身体状況に応じた指導方法が身についていなくてはならない．また，それらの学びは，学生自身の競技力の向上を目指す上でも大変重要となる．そして，障害のある子どもや障害のある人への系統的な運動・スポーツ指導が障害のない一般の人のスポーツ指導に通じることを体験的に学んでいる必要がある．

⑤ スポーツ文化の継承・発展に貢献できる力を身につけている．

学んだスポーツ科学の知見に基づき，先人から受け継いだスポーツ文化を創造し，さらに次代に引き継ぐという継承・発展の責務が私たちにはあり，そのことを自覚してスポーツ実践やスポーツ指導に取り組むことができる必要がある．

⑥ 地域をはじめとした様々なスポーツや運動の実践の場面に対応できる実践力を身につけている．

様々なスポーツや運動の実践の場面で生じている諸課題を的確に発見し，諸資源を利用して解決に導く実践力，人々のニーズに応じた事業を企画・立案し組織的に運営・展開していく力，集団や団体を組織し経営する力は，競技力の向上を含む自身のスポーツ実践を支え，そして人々に適切にスポーツを提供し普及していくために必要である．

＜思考・判断・表現（福祉大スタンダード）＞

⑦ 真実を見極める「知」への探求心を有している．

「知」への探究心によって，スポーツ文化に関連する諸科学の知識をより広く身につけておくことで，スポーツ文化をより深く理解することにつなげる．

⑧ 国際社会を含む諸領域での情報の伝達・判断・理解力を身につけている．

基礎学力としての語学力や情報収集・伝達のための情報機器の有効活用力を生かし，人々がつながり合うために発揮されるコミュニケーション力は，グローバル社会に対応する人材には不可欠である．

⑨ 他者と，スポーツを含む多様な手段によって良好な関係を構築する力を身につけている．

弱者や困っている人に共感し，そうした人々に友愛の念をもって関係性を構築し，スポーツを通じた共生社会の形成，さらに「ふくし」の発展に資することは本学の建学の精神に通じると考えている．